地域密着型薬局のあるべき姿

城戸真由美* 株式会社 阪神調剤薬局

(受付: 2014年7月25日 受理: 2014年8月1日)

要 旨:世界諸国に例を見ないほど急激に超少子高齢社会に突入している我が国では、社会保障制度はすでに耐えられないほど疲弊してきている。2014年1月に厚生労働省が都道府県に公表を通知した「薬局の求められる機能とあるべき姿」には、国の財政を圧迫する医療費の膨張に歯止めをかけるための薬局・薬剤師への期待も感じられる。国民に薬を安全にかつ安定して供給するために始まった医薬分業が日本においても進展したこの20年間、薬局の多くは調剤業務に特化してきたため、国の求める薬局・薬剤師の機能をすべて備える薬局はまだ少ないのではないだろうか。一方、古くから医薬分業が確立されてきた欧州の薬局は、処方箋調剤のみならず、OTC薬やその他のヘルスケア用品等も取り扱い、「薬局の求められる機能とあるべき姿」に応えうる地域密着型薬局が、当たり前の薬局の姿として形成されているように思われる。欧州の薬局はドイツを原点としている。日本でも本来あるべき地域密着型薬局を早急に再構築するため、長い間、地域密着型薬局としての機能を発揮してきたドイツ薬局の取り組みを大いに参考にしたいと思う。

キーワード:地域密着型薬局,薬局の求められる機能とあるべき姿,医薬分業,ドイツ薬局

P°S°I 107

製剤特性による先発品と後発品の比較研究評価 一薬剤師の視点からみる患者メリットを得る後発品選択[I]— ステロイド配合外用剤(リンデロン-VG®, マイザー®)

和田 侑子 石井 文由* 明治薬科大学医療製剤学

(受付: 2014年7月24日 受理: 2014年8月15日)

要 旨:先発品と各後発品それぞれの,経済的メリットおよび使用感メリットの両面を理解することは,医療機関において採用品目を選定する際,あるいは,複数採用の機関において患者と医療従事者との間で薬剤を選定する際に極めて有用である.本総説では,皮膚科領域において汎用されているステロイド配合剤(リンデロン-VG®,マイザー®)を例にとり,後発品使用による経済効果および先発品および各後発品の製剤学的評価結果を中心に,後発品選択時の根拠としての情報を統括的にまとめて考察した.先行研究により明らかとなった先発品および各後発品間の製剤学的特性差について解説し,患者それぞれが好む使用感に近い製剤を選択することで得られるメリットについて総説した.

キーワード: リンデロン-VG®, 後発医薬品, ベタメタゾン吉草酸エステル, ゲンタマイシン硫酸塩, ジフルプレドナート, 経皮吸収, 製剤特性

 $P \circ S \circ I$ 115

認知症認定薬剤師制度の必要性 ~認知症に関する保険薬局薬剤師の意識調査~

榊原 幹夫*1,2,3 大上 哲也4,5 武7 水野 由夏6 藤原 金澤 智美⁸ 正朝10 金田 大太11 啓12 川原 淳9 亀井 浩行³ 一般財団法人杉浦地域医療振興財団」、株式会社スギ薬局2,名城大学薬学部病院薬学研究室3, 青森大学薬学部4, 東北大学医学部病態神経学研究室5, クオール株式会社6, 株式会社アインファーマシーズ⁷、株式会社大新堂⁸、株式会社共和コーポレーション⁹、 総合メディカル株式会社10,大阪赤十字病院神経内科11, 大阪市立大学大学院医学研究科脳神経科学講座12

(受付: 2014年3月24日 受理: 2014年5月26日)

要 旨:【はじめに】地域の保険薬局が、認知症施策の重要な拠点としての役割を担うと考え、保険薬局薬剤師に意識調査を実施したので、その結果を報告する。【対象と方法】 2013 年 11 月 24 日に開催した日本薬局学会のシンポジウムにて保険薬局薬剤師 130 名に対して、認知症に関する 11 間の質問について回答を得た。【結果】80%強の保険薬局薬剤師が、認知症特有の専門的知識は不可欠と考えている。しかし、認知症の診療チームに携わり、実践している保険薬局薬剤師は、6.9%と少なかった。また、約70%の薬局薬剤師は、認知症の疾患や薬剤を深く理解できるような研修制度や認定制度があれば、参加したいことが明らかとなった。【考察】保険薬局薬剤師は、認知症に関して積極的に関わりたいと思っているが、実践する薬局薬剤師は少ない、認知症認定薬剤師制度の設立が望まれる。認知症を適切に理解する薬剤師を育成することが、地域包括ケアの認知症施策において重要と考えられる。

キーワード:認知症、保険薬局薬剤師、認定薬剤師、地域包括ケア、意識調査

124 Pharmacy Society of Japan

地域包括支援センター従業者の薬剤師業務に関する 認識についてのアンケート調査

榊原 幹夫*1,2,3 城戸 充彦^{1,2,4} 栗林 淳^{2,4} 関 壮史^{1,4} 亀井 浩行³ 鍋島 俊隆^{1,4} NPO 法人医薬品適正使用推進機構¹,株式会社スギ薬局²,名城大学薬学部病院薬学研究室³,名城大学薬学部地域医療薬局学講座⁴

(受付: 2014年6月16日 受理: 2014年7月30日)

要 旨:【目的】地域包括支援センター従業者の薬剤師業務に対する認識を把握することにより、地域医療を推進する上での薬剤師の課題を考察することを目的に調査を行った. 【方法】愛知県内全てのセンターへアンケートを送り、調査の回答を郵送にて回収した. 【結果】「薬剤師と連携がとれているか」については「とれていない」の方が71%と大幅に多かった.薬剤師が実際にしている業務についての認知度が非常に低い項目があった.薬剤師に関する情報を得る手段についての調査では「地区町村レベルの勉強会や研修会に地元の薬剤師に参加してもらう」が最も多く、82%が希望していた. 【考察】地域包括支援センター従業者と地域の薬剤師との連携を改善することで地域医療推進に繋がる可能性が示された.薬剤師としては、勉強会等でセンター従業者にアプローチを行い、薬剤師業務の認知度向上を図って業種間連携に繋げていくことができると考えられる.

キーワード:地域包括支援センター、愛知県、薬剤師業務、地域医療

 $P \circ S \circ I$ 133

介護職員を対象としたがん、緩和ケア領域における 実態調査と研修実施効果

土井 信幸*1 中野 宜範² 高崎健康福祉大学薬学部臨床薬学教育センター¹,株式会社日本生科学研究所(日生薬局)²

(受付:2014年1月7日 受理:2014年5月13日)

要 旨:がん治療と緩和ケアを在宅で実践していく課題として医療と介護の連携強化によるがん患者に対する不安の解消、緩和ケアや医療用麻薬に対する偏見と誤解の解消が挙げられる。また、外来や在宅において介護職員が両領域に携わるケースは増加している。本検討では、介護職員(ケアマネージャー、ヘルパー、作業療法士、管理栄養士、保健師)にがん・緩和ケア研修(2 時間)を実施する前に行った事前アンケートと研修終了後の事後アンケートの解析結果から研修実施の効果を検討した。その結果、介護職員の多くは研修参加前にはがん患者の対応で困り、不安となった経験を有していたが、研修後には解決できると回答した参加者が有意に増大した。以上より、がん治療と緩和ケアの領域において困った経験や不安を抱いたことのある介護職員が多く、がん・緩和ケア研修という医療と介護の連携を通じて、介護職員が経験した困りごとや不安の解消の一助となることが示された。

キーワード:緩和ケア、介護職員、研修、がん治療、在宅

142 Pharmacy Society of Japan

岐阜薬科大学附属薬局における実務実習生の実習調剤ミスの分析

井口 和弘* 1,2 山下 修司 1,3 伊藤 絵美 1,2 野口 義紘 1,4 窪田 傑文 1,2 中村 光浩 1,5 寺町ひとみ 1,4 杉山 正 1,3 岐阜薬科大学附属薬局 1 ,岐阜薬科大学薬局薬学研究室 2 ,岐阜薬科大学実践社会薬学研究室 3 , 岐阜薬科大学病院薬学研究室 4 ,岐阜薬科大学医薬品情報学研究室 5

(受付:2014年4月9日 受理:2014年6月16日)

要 旨:薬局における実務実習において、調剤は実習の主要かつ重要な項目である. 一方で調剤業務を行う上で調剤ミスは可能な限り少なくしなければならない. ミスの防止には、実態を調査した上で、その要因に基づき対策を講じることが必要である. そこで、学生による実習調剤において発生するミスの実態を明らかにする目的で、岐阜薬科大学附属薬局にて実習調剤を行った学生 103 名により報告された 2697 件の実習調剤ミスの傾向について分析を行った. その結果、実習調剤ミスのうち最も割合が大きかったものが「数量間違い」であり、報告されたミスの約 51%を占めた. また、薬剤師に比べ実習生では、酸化マグネシウムやパントシン散等の散剤の分包品の数量間違いが多く認められた. 本研究では、調剤経験の浅い実習生によるミスの傾向を明らかにすることができた. 今回の結果は、実習生を受け入れる薬局での調剤過誤防止の対策を立案する上で一助となると考えられる.

キーワード:薬局実習、調剤ミス、散剤分包品、数量間違い

150 Pharmacy Society of Japan

マクロライド系抗菌薬の処方実態に基づく慢性炎症性疾患に 対する少量長期投与療法の有効性に関する再検証 一常用量投与との比較—

岩山 訓典^{1,2} 堀内 翔太¹ 粟屋 敏雄² 大滝 康一^{1,2} 田崎 嘉一² 松原 和夫³ 早勢 伸正^{*1}

北海道薬科大学薬学部薬物治療学分野¹,旭川医科大学病院薬剤部²,京都大学医学部附属病院薬剤部³

(受付:2014年3月24日 受理:2014年6月20日)

要 旨:旭川医科大学病院で使用されているマクロライド系抗菌薬の処方状況について調査した。また、マクロライド少量長期投与を受けた患者の臨床検査値および呼吸機能の変化を調査し、少量長期投与療法の有効性について再検証した。日常診療で処方されているマクロライド系抗菌薬は76.8%が14 員環系のクラリスロマイシン(CAM)であり、16 員環系は処方されていなかった。また、CAM やロキシスロマイシン(RXM)は、炎症性疾患の治療に多く処方されていた。更に、1 日あたり CAM 400 mg あるいは RXM 300 mg 投与に比べて 200 mg あるいは 150 mg を長期間投与する処方割合が高く、治療後に白血球数やCRP 値の低下、呼吸機能の改善が示された。一方、抗炎症作用を目的に CAM や RXM による常用量短期投与も行われているが、治療効果は低いことが示唆された。以上より、抗炎症作用を目的とするマクロライド投与療法では少量長期投与に有効性が高いことが、処方実態調査より再確認された。

キーワード:マクロライド系抗菌薬, 抗炎症作用, 長期投与, クラリスロマイシン, 少量, 処方実態調査

 $P \circ S \circ I$ 157

抗ヒスタミン薬処方が原因と疑われる皮膚掻痒悪化を 薬剤師・医師協働の定期的健康相談によって回避した1症例

河内 明夫*¹ 冨重恵利紗¹ 堀 雅晴² 園田純一郎¹ 鳴海 恵子¹ 佐藤 圭創³ 本屋 敏郎¹ 九州保健福祉大学薬学部臨床薬学第一講座¹, 医療法人相生会にしくまもと病院², 九州保健福祉大学薬学部臨床生化学講座³

(受付:2014年4月7日 受理:2014年7月31日)

要 旨:我々は宮崎県北部山間地域住民を対象とした薬剤師・医師協働による定期的健康相談を地区公民館において実施している。今回抗ヒスタミン薬処方によって両手掻痒が繰り返し発現していると疑われる1例を経験した。症例は53歳の女性で両手皮膚掻痒のため2002年より複数の皮膚科にて通院加療中であった。2010年7月から2011年1月までの間に抗ヒスタミン薬の処方組み合わせの変化とともに掻痒の継続、消失時期があった。また自己判断による抗ヒスタミン薬残薬の服用後、掻痒再燃という経過を辿ったため、服用中止を指示した。その後定期的健康相談の下で生活指導および保湿クリームによる手荒れ対策を指導し、2013年6月現在、皮膚掻痒はコントロールできている。定期的健康相談において抗ヒスタミン薬服用の妥当性を検証することで、その副作用を回避し、相談者への健康支援を行うことができた。

キーワード:薬剤師、健康相談、掻痒、抗ヒスタミン薬

P°S°I 167